複合的資源管理型漁業促進対策事業調査 (太平洋海域)

1. 底曳網漁業改善調査

2. 刺網漁業改善調査

(抄録)

蛭名 政仁

1. 底曳網漁業改善調査

目 的

底曳網漁業は目的の魚と一緒に混獲される有用魚の稚魚や未利用魚を投棄している実態がある。そのため、コスト増や労働作業増、資源上の無駄、また、商品価値の低下などの問題が認められる。このような混獲・投棄の対策の一つとして、産卵親魚や稚魚、未利用魚を保護するための期間及び保護区域の設定等を行うに必要な基礎資料を得ることを目的に、小型底曳網漁業における操業実態及び漁獲物の構成を時期別、海区別に調査する。

結 果

1. 1 操業回数分布

2001年の操業海区は、時期により多い海区が見られ1月と2月及び11月と12月には小川原沖での操業が比較的多く、3月から10月にかけては尻屋から階上までの広い海域での操業が行われていた。月別操業回数では、9月が972回で最低、4月が1,764回で最高であった。(月平均では、1,352回の操業)

1. 2 主要魚種の CPUE 分布

1. 2. 1 マダラ

漁獲量は、1月から6月までは少なく、9月から12月に多かった。CPUEの高い水深は水深200m以深で、特に泊から八戸沖の水深300から400mにかけての海区で高かった。

1. 2. 2 スケトウダラ

漁獲量は、1月から4月までは少なく、5月以降増加し、9月にピークとなり10月以降減少傾向となった。CPUEの高い水深は水深180mから280mであった。CPUEの高い海区は、小川原沖から八戸沖海域にかけてであった。

1. 2. 3 ヒラメ

漁獲量は、4月と11月が多く、1月と6月は減少した。CPUEの高い水深は、特にきまった水深帯は認められず、漁獲量の多い時期にはいずれの水深でも高かった。中でも高かったCPUEの海区は、小川原以南であったが、海域全体で万遍なく漁獲されていた。

1. 3 小型底曳網漁場における漁場（海底）水温について

観測を開始した6月の漁場水温は、水深75mの付近で12℃台、また、水深180mから400mにかけては2℃台で一定であったが、その後、9月以降（7、8月禁漁）からは、全層にわたり水温が上昇した。12月には、水深200mで5℃から9℃台、水深350mでも4℃台までに昇温していた。

2. 刺網漁業改善調査

目 的

刺網漁具による漁獲実態から異体類の季節的な分布生態を把握するとともに、刺網操業改善のための隻数基礎資料を得るため、標本船9隻（八戸市南浜漁協1隻、はちのへ漁協1隻、三沢市漁協1隻、泊漁協1隻、横浜町漁協1隻、野辺地町漁協1隻、平内町漁協小湊支所1隻、平館村漁協1隻）により調査する。

結 果

2. 1 刺網標本船調査

3寸5分以上の目合いの使用割合は、太平洋南部海域では13%、陸奥湾東湾の南部海域では51%から65%と低かった。その他の海域では95%以上と高かった。

太平洋南部海域における月別使用反数は、84反から725反であった。例年、9月から11月にかけては、小型ヒラメ（1歳魚）を狙った操業となることから、使用反数が増加し、また、用いる目合いも3寸1分から3寸3分が主体となっていた。